[現代社会学部紀要　1巻第1号，P55－68（2003）（翻訳）]

「ディアコニーと近代における内国伝道の歴史」　第2章*

E.バイロイター著　　山　城　　順　訳**

キーワード:
キリスト教救護活動、社会改造、共同体、

要旨

すでに「ディアコニー研究」にとって基本テキストとなっているE. バイロイター著「ディアコニーと近代における内国伝道の歴史」の第2章の翻訳である。宗教改革後の中世ヨーロッパをおそった困窮と、それにたいするキリスト教の救護活動をのべている。政治や経済の行き届かなかった負い目をぬぐっていくという消極的な思考ではなく、救護活動が人材を育成し、新しい産業を生み出した。

目　次

第2章　敬虔主義における先駆者
シュペーナー、アウグスト・ヘルマン・フランケ、ツィンツェンドルフ、啓蒙主義社会の慈善事業
1. 30年戦争、著しい身分の差別の起こり、信心がうけた衝撃
2. 敬虔主義の父・シュペーナー、シュペーナーの社会批判と社会政策、公共の貧民扶助の復活、ベルリンの救貧院
3. アウグスト・ヘルマン・フランケ、キリスト教施設のディアコニーの新しい時代、ハレの孤児院、信仰の業、模範的な衛生学、寄付する喜び
4. 伝道的、教育的、社会的目標に結びついたディアコニーの出発、信仰教育、ハレの教育は世界教会との関係を結ぶ
5. 公共生活と社会生活の改造を目指す覚醒したキリスト教徒による総合的宗教改革
6. ツィンツェンドルフと兄弟団、ディアコニー的な行動をする教会のモデル、宣教奉仕、共同体にふさわしいこと、兄弟団
7. ベツレヘム、アメリカにおける「共産主義的」ヘルンフート居留地、自発的精神と喜び
8. 物乞い、飢饉、18世紀末期における伝染病、啓蒙主義社会の人道的な慈善事業
新たな衰退、いつまでも残る功績
訳者あとがき

* Received Jan 10, 2003
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　福祉コミュニティ学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

第2章

敬虔主義における先駆者、シュペーナー、アウグスト・ヘルマン・フランケ、ツィンツェンドルフ、啓蒙主義社会の慈善事業

1
30年戦争、著しい身分の相違の起こり信心がうけた衝撃

30年戦争はディアコニーの歴史にとって一つの深い転機を意味した。そのかぶとの紐は、なおしっかりと引かれていた。このことは短くのべなければならない。

戦争の主要な敗者はうたがいもなく農民であった。諸都市は、武装していない村の集落よりも、その外壁によって、戦争の暴虐から身を守ることができた。家畜と種が足りなかった。加えて戦後1656年から1657年に東プロイセンにタタール人が入ってきて、およそ10万人の命が奪われた。1709年、苦しむ地にペストが広まり、ベルリンの門の前まで達した。約15万5千人が生命を奪われた。南ドイツではもっとよくなかった。バイエルンのより広い部分では土地の3分の1以上が荒れていた。帝国諸都市における住民の数は17世紀の終わりになっても絶え間なく減少していった。

農民階級は、しばしば悲惨な状況にあり、国民の精神的また政治的生活から殆ど完全に締め出されていた。市民階級は苦労しながら漫然と暮らしていた。宗教改革の時代の、ドイツの帝国都市の市民階級の輝きは、多くは残っていなかった。手工業は世間に広まった金不足のために沈滞した。物乞いをする人が増大し、陰険で凶悪な性質をもつようになった。多くの退役兵士たちが一団となって集まり、しばしば脅迫的にふるまうようになったからである。処罰が要望された。さらにプロイセン王は1735年、3ターレル以上の価値のあるものを盗んだ泥棒は、その行為をした場所で、絞首刑にするように命じた。縄はいつでも手もとにあった。

貴族は、戦争による財産損失を、とりわけ北ドイツにおいて悪名高い「農民追放」によって、埋める事が出来た。[1] だが、地方貴族の大部分にとって、生活状態は惨めなままであり、田舎者となった。この「田舎の貴族」と、フランスの習慣を生んだ宮廷貴族との間に、著しい違いが起こってきた。

社会的相違が、以前になかったような仕方で、深まるようになった。騎士貴族は「下郎」すなわち他の諸階層を遠ざけた。

居城は公園と鉄柵によって周辺から隔離された。礼拝堂の中には祈祷の小部屋が取りつけられた。聖晩餐式の時は身分の区別に従って祭壇の前に進み出た。祭式係は、次は誰が前に進み出るのかを合図した。「その労苦の終わりを告げる最後の合図はわずかなチップだった」。身分の高い人の埋葬は聖職者の弔辞はなく、たいまつの光の下で夜になされた。

礼拝共同体は、着席順においてこの世の社会序列を写す像となり、わきに寄せられた身分の低い人々にとっては、教会は日常生活と同様に侮辱の場所であった。[1*]

聖職者の社会的立場は、30年戦争以後、低くなっていた。牧師は他の市民の人たちと同様、貴族から見下げられた。宮廷では、君侯の良心顧問官として以前のほぼ全能の宮廷説教者にかわって、旅をして教養豊かな哲学に造詣の深い侍医が重んじられた。

都市において経済的に最悪の状態にあったのは、工場制手工業の、たいていは**織物工場労働者**であった。彼らはとりわけ同業組合で職人が持っているような保護を失った「第4階級」の先駆けであった。

それに加えて、**主流であった正統信仰は内的危機**を迎えた。万人祭司について語る人はいなくなった。ルターによって克服された聖職者と信徒との区別は、牧師職を尊重する事によって再び戻された。聖職者は教理の純粋さと正統信仰が守られているかどうかを監視した。身分の相違の深刻化は教会生活の中に浸透し、30年戦争において**くすぶっていた教会批判と社会批判の風潮**を、増加させた。あからさまに語られる教会に敵対する風潮が、つまり分離主義者たちの風潮が、ヨーロッパにはっきりあらわれてきた。それはドイツでは1690年から1730年の間にその頂点に達した。秘密の無神論がひろまった[1**]。山積みの改革案が浮上した。正統主義の中の特定の派閥はそれを熱心に取り上げた。(**改革正統主義**)

2

敬虔主義の父・シュペーナー、シュペーナーの社会批判と社会政策
公共の貧民扶助の復活、ベルリンの救貧院

これらの全般的に騒然とした空気の中で、1675年**フィリップ・ヤーコプ・シュペーナー**(1635-1705)はその周りに群れをなして集まる新しい信仰運動・敬虔主義のための信仰方針文書「**ピア デシデリア**」(敬虔なる願望)をもって登場した。シュペーナーは、それによって敬虔主義の父となった。６つの明確な点で、彼は教会の改善のための、またキリスト者の生活の改善のための、改革の願いを一つにまとめた。彼は、とりわけ**万人祭司主義の復活**と、信徒が自由に教会活動を自由に出来ることを、求めた。信徒は、牧師たちと一緒に聖書を研究するチャンスが与えられなければならなかった。死んだ正統信仰に反対して、一つの信仰を求めた。彼は愛によって行う信仰を求め、「信仰と行為」、この二つは別のものでなく、互いに属しているという、ルターの関心事をよみがえらせた。[2]

一般に正統信仰が将来を見て心を動かしている悲観主義に反して、シュペーナーは来たるべき偉大な時について、全世界に宣教する可能性について、ユダヤ民族のキリスト教への改宗について、そして対抗宗教改革の克服について語った。キリストを信じる信仰のために働く事は再び深い意味を獲得した。[3]

社会批判の声は、17世紀にスピリチュアリストたちだけでなく、また多くの立場の人たちから発せられていたが、それはシュペーナーと密接に関連している。すでにヨハン・アルントの、ルター一門の、幾世代も通して、精神修養の本となっていた「真のキリスト教」の中に、**強い社会的情熱**があらわれている。財産問題について、次のような言葉がある。「火は金持ちのために燃えるように、貧しい者のためにも燃える」「兄弟を愛さないもの、そんな者がどうして神を愛することができようか?」[4]

ヨハン・アルントは信仰の書物を携えて、社会的な関心という難題を、ドイツという家に持ち込んだ。極端な社会的差別は不可抗力なものとは思われなかったのである。フィリップ・ヤーコプ・シュペーナーは「ピア デシデリア」の中で、「**貧困は我々キリスト教の汚点である**」と言い、社会の考え方の転換と社会的行動を呼びかた。シュペーナーは、ヨハン・アルントの「真のキリスト教」に関する説教の中で「本当に必要なもう一つの財産の共同」をはっきりと求めた。われわれの所有と財産は「共同の財産」と思うべきである。[5]

そのなかに社会的構造を持っている教会は、シュペーナーにとってもむずかしかった。そこで、そのことに熱心なキリスト教徒自身、**社会的団体**として団結して、神の国の業のために一致できる**「自由」**を求めた。彼は、献身と、キリスト教の愛を個々のキリスト教徒の職業の義務の中に求めた。17世紀の独特な罪について、「貴族」の時を浪費するような酒宴、踊り、ぜいたくな衣服、芝居見物を、節約し、断念するように要求した。[4*]　彼は領主に、福祉のために彼の臣民を世話し、そのために君主の職についているということを〔自覚するように〕期待した。国はそ貧しい人を保護するために努力しなければならないと。

ここでついにドイツ・プロテスタントの中に活動的な社会福祉政策が設けられた。この敬虔主義は、神が出会ってくださり、また神が服従するようによびかける声を聞き分けるすべての人が自分をささげるするように義務づけた。

シュペーナーは先頭を行った。彼は、**無計画な施し物の分配をしりぞけ**て、すでに1666年フランクフルトの町の聖職者の主席牧師として、町の貧民救済を新しく組織した。[6]　彼はこのことによってドイツ国内に広く知られるようになった。選帝侯フリードリヒ３世は1693年彼に**ベルリンにおける物乞いの悩みを改善する所見**を求めた。当時、ベルリンは人口が一世代に約3万人から5万人に増加していた。その中には多くの退職した兵士、戦死した傭兵の寡婦と孤児が見られた。社会的困窮は筆舌に尽くしがたいものがあり、妻と娘が数え切れないほど売春に雇われていた。シュペーナーは、彼の所見の中で、施し物をするより、仕事を与えることを望んだ。傷痍軍人、寡婦、孤児はだれかれの区別なく、信仰の有無に関わりなく、公共の施設で、人間に値する世話を受けるべきだ。お金の工面は、市民が毎週の家庭で集めた募金によって引き受け、国は退役軍人のための給付金を支払った。矯正施設と救貧院の管理は、ベルリンの監督教区長の２人の議長の下に置かれた、市民によって選ばれた、12人委員会の手に委ねられた。この「中央貧民金庫」は、1695年に選帝侯によって創設された。２～３年の間に町の街路の風景から物

乞いする人が見えなくなった。1702年に救貧院、「**大フリードリヒ病院**」が生まれた。そこからベルリン施療院、孤児院、精神病院から生じた。設立後、2年には、ほぼ2,000人を助けるようになった。[7]

ドイツの多くの場所に、間もなく、似たような施設が生まれた。例えば、1725年、ポツダムに大きな軍の孤児院が出来た。これらの施設は確かに、はなはだしく困窮していた。だが、それは一つの大きな社会的な進歩を意味していた。というのは、30年戦争以降、公共の貧民援助は停滞していたからである。その場合、ウールホルンは正しく次の事を述べている。即ち、30年戦争以降、住民を搾取して、ヴェルサイユの再現を可能とするような、無数の用地をもっていたドイツは、新しい社会福祉政策のために決して実り多い土地ではなかった。そこで人はシュペーナーが先に立ってしたことの意味がわかったのである。[8]

国と福音主義教会内の特定のグループによって軽蔑されていた敬虔主義者たちは、再び活発になり、新しい思想と目標をもって社会的困窮に立ちむかった。

3
アウグスト・ヘルマン・フランケ
キリスト教施設のディアコニーの新しい時代、ハレの孤児院、信仰の業、模範的な衛生学、寄付する喜び

アウグスト・ヘルマン・フランケ(1663-1727)は、シュペーナーの友人であり、シュペーナーの弟子である。当初彼は師が定めた目標のもとで行動した。1695年の「グラウハウの貧民規約」は彼がハレの郊外の牧師として新しく作成したもので、教会で集められた寄付を支給して、公共の福祉の伝統的な道をさらに進めた。その時、彼は新しい分担金によって救貧基金の収入を高める事も熱心に始めた。土地の者でない人を拒絶するような当時支配的な地方エゴイズムに対しては、フランケ自身が反対している。病気になった貧民や宿なしを「運搬車」で街道に運び出し、町の境に置いてきて、それを繰り返す当時の大変ひどい業務は、彼にとって、キリストの愛の掟と両立するものではなかった。[9]

新設のハレ大学のこの社会批判的牧師・教授は、ささいな、もう一つのきっかけによって、すべての従来の伝統から離れるようなった。**キリスト教ディアコニーの新しい時代がはじまった。**

フランケはある時、4ターレル16グロッシェンを、救貧箱の中に見つけた。

*「私はそれを手に受けた時、信仰の喜びをもって次のように言った。即ち、これは正しいことに役立てなければならない誠実な資金である。私は貧民学校をはじめようと思う。私はそのことについて、血肉と相談しなかった。1695年のイースターに、私は貧民学校を非常にわずかな蓄えをもって始めた。その時、上に言及した4ターレルと16グロッシェンは、それから、貧民学校だけが用意されたのではなく、すぐあとに孤児院がうながされてつくられたよい出発であ**り、最初の資金である。**」*[10]

フランケは神を信頼して、新開拓地を開いた。彼は国の援助がなくても、寄付金による資金や確実な収入がなくても、その日暮らしをする覚悟があった。つきつめた懐疑を通り抜け、根源的な力によって神の現実に強制されたその人は、驚くべき内的信頼性をもって道を歩いて行った。心に抱いた計画に従うのでなく、神は彼を見捨てないという確固たる信仰に基づいて、信じられないような速さで事業は急速に発展した。

彼は近代的な人間である。彼は、彼の誠実な協力者・ノイバウアーを、ヨーロッパで先進的な社会的福祉施設をもつ、オランダの豊かな市民文化の中に送り込んだ。

ドイツで初めて、アウグスト・ヘルマン・フランケが、—シュペーナーの時にはまだ実行されていなかった「孤児院と矯正院と刑務所」とが一緒になっていた施設から—孤児院を分離した。

フランケがハレに建てた孤児院は**ドイツで最も近代的なもの**であった。彼の協力者であるノイバウアーが、オランダに持っていった質問用紙は、**近代の衛生調査の先駆**となっている。身体の不潔さを不快と思わなかった時代に、次のような質問がなされた。「口を洗浄する際に子どもたちは何で歯を磨くのか?」「子どもたちはときどきは入浴するのか?」「どれくらいの人が櫛でといたり、ブラシをかけているのか?」「ふきでものや疥癬、害虫を防ぐ手段として、何があるのか?」。「どのようにして感染を防ぐのか?」。[11] 新しい宮殿のような孤児院がハレに開設された。

少人数の家族原理による教育はまだなされて

いなかった。だが、いたるところで多人数の教室が避けられる傾向にあった。つとめて行われた牧会的個人指導の強化は、小さな見通しができるグループ教育の方向をとった。

フランケは「**祝福に満ちた足跡**」の中で学校を創設した時の信仰の冒険を書いている。お願いしてお金を集めたことはなく、依頼の手紙も書かなかった。金庫はしばしば空であった。フランケの未婚の仲間たちは最初は山上の説教の聖句に従っていた。即ち、二枚の上着を持っている人はそれを持たない人に与えよと。彼らは孤児のために必要な経費を支払えるように一度はスーツを売らなければならなかった。

「仕事をする時に、そのような試練の時であり、極度に貧困であったことは、一度だけでなく、何度もあります。即ち、私は何度やっかいなことになったか知りません。その時、私は何も持っていないだけでなく、もらこともできなかった。初めに私は考えた。助けが必要になる時がきたら、神は助けをもって臨んでくださるだろう。だが、私は次のことを学ばなければならなかった。即ち、私の時がまだきていないということが何を意味するかを。そして神は、私たちがたとえば困った時に、神に願うのとは別の時に、しばしば私たちを助けてくださるのだということである。

そして、そのような方法で人はダビデの言葉「ああ汝、主よ、いつまでなのですか」(詩篇6：4)を学ぶ。私は残り一文も持っていないことが幾度もあった。にもかかわらず、次の日に200人から300人もの人のために買い物銭がなければならないのだ。私は、時には、戸口で貧しい人に手渡すために、なにがしかのグロッシェンとほかにわずかな硬貨をもっていなければならない。即ち、生活必需品以外のものでお金を作り、それでパンを買わねばならなかった・・・「次のようなことがあった。経理担当者が私のところにお金がないものだから、なんとかしていくらかの小銭でも得たいと、心痛めて探し回った。彼は子ども達が暗闇の中ですわっていなくてもよいように、なん本かのローソクでも買えればと思ったのだが、すっかり暗くなってしまうまでに、何も手に入れることが出来なかった。」[12]

その日暮しをしなければならないが、かといって没落しているのではないと、ハレの施設の最初の歴史に、消すことの出来ないものとして書かれている。19世紀と20世紀に内国伝道の活動において、このことが文字通りくり返してきたことに言及せずに、近代におけるディアコニーの歴史について書くことは、事実を意図的に非学問的に隠してしもう事である。

多くの不安のなかにあって、すばらしい祈りが聞かれた困難な設立年からの、フランケの報告は、計り知れない影響を呼び起した。それぞれ献身の用意の出来たフランケの協力者であったのは青年と並んで大学生たちであり、彼らの大学教授の大胆さを全世界に広めた。彼らは居城の高級貴族の前に歩み出て、それを情熱的に報告した。学生たちはフランケの**祈りが聞かれる**〔経験の〕中で、重要な役目を引き受けた。彼らはしばしばなにかの施しものをもって、喜びに輝いた目をして、ほどよい時にフランケの前に立っていた。ドイツの内外で、例えばロンドンでも、貴族や躍進目覚しい市民階級の中に、みごとな事業の拡充のため資力を出す友情の輪が形成された。

4
伝道的、教育的、社会的目標に結びついたディアコニーの出発、信仰教育、ハレの教育は世界教会との関係を結ぶ

このとぎれることのない賜物の流れは、おそらくもう一つの事実ほど重要というわけではない。フランケは当時の信仰の危機のただなかにいる何千ものヨーロッパ人にもう一度**活ける神を頼り**、今からはぜんまい仕掛けのように自動的に走り出すような創造世界が、動きはじめないために、遠い昔の世界建築家を気にかけるようなことがないように、励ました。

新しい世代は、もはや父のやり方にそのままよりかかろうとするのではなく、経験による確実性を得るために仕事場で自主的に実験し、人は神と共に経験することが出来ると、フランケが彼らに言ったことに耳を傾けた。信仰は経験によって生きるというものではないが、彼は経験をする。**フランケの場合、ディアコニーの出発における福音的・宣教的意志は、後にキリスト教ディアコニーに深い決定的影響を与えた社会的・教育的目標と結びついている。**

フランケの教育学は大学や学校で用いるように定められた。ついには約3,000人の学童と学生が毎日集まったハレの種々の施設のすべてにおいて、若者が信仰をもつように、生活の中の

いたるところで役に立ち、援助する準備をしているように教育され、才気あふれる行動に満ちて、いつも神の国のために働く協力を申し出る準備をしていた。[13]

彼の新しい学校方式は、17世紀の学校改革者の提案にさかのぼって、なおヨーロッパで有名なという評価をされる、**他のものでは替えられない新しいものを生んだ**。私たちは、その学校ピラミッドの中に、自由学校と並んで国民学校を見出す。貴族の家庭の子息のために「ペタゴギウム レギウム」が生まれ、一方才能のある市民階級の子どものために、高等学校卒業資格へと導くラテン語学校が併設され、改造された。彼らを神の国のために共に働くように養成するために、フランケは才能を持っている子どもをすべての階層から募集した。そのため、彼自身は、最も貧しい子どもを高等学校卒業資格をとるまで支援した。それと同時にフランケが学校制度のなかに身分上の規定を大幅に認めたとしても、**従来の高い身分の人の教養の特権は根本的に破られた**。

女学校の設立は本質的な意味を証明している。1,000人を超える女子が同時に彼の学校に通った。最初の女子ギムナジウムの創設と共に、それが発展しなかったとしても、女子が大学進学資格をとるまで教育をする可能性は開かれた。フランケは、それを無条件に支持した内容豊かな女子教育の最初のパイオニアである。

教員養成において、フランケは新しい道を歩いた。彼は、最初の教師を、2時間の授業を聴講している赤貧の学生で、施設にある無料給食の席を受け、互いに臨時に聴講をしている学生たちのなかに見つけた。これらのゆるやかに組織された「セミナリウム・プラエセプトルム〔Seminarium Praeceptorum〕」から「セミナリウム・セレクトゥム・プラエセプトルム〔Seminarium Selectum Praeceptorum〕」が生まれ、その中で予備学校から選ばれた10人の優秀な学生教師が2年の入念な養成を受けた。ここにドイツにおける組織された教員養成の始まりがある。

19世紀にいたるまで学校制度を悩ませた抑制のない**殴打**はここで禁止された。授業中や休暇中の**絶え間ない青少年の監視**はされたが、遊びは禁止されなかった。ある種の限界が明らかになり、時代の状況から、配慮と愛の掟が、この全体の中で評価されねばならなかった。

ある種の**祝祭文化**は、最初からあった。子どもたちはその週は特に嬉しく、小さな贈り物をもらった。[14] 熱心な子どもや熱心な学生たちが学校町に特徴を与えた。

まもなく、ハレの教師たちが、新しい学校方式によって設立される様々な学校を、調整するように、諸方面からフランケに要求した。1695年からロシアとの最初の関係が結ばれた。ペーター大帝はハレに大変興味を持っていて、女帝は匿名で施設を訪問した。バルト海沿岸の皇帝の大臣はフランケの個人的な友人であった。オランダとイギリスを越えて、北アメリカ、南アメリカとの関係が広がり、スカンジナビアを越えて東印度へ、シュレージエンを越えてオーストリアとハンガリーへ、ジーベンベルゲンとコンスタンチノープル、スイスをこえてフランスとイタリアへ広がった。フランケの生徒たちは新しい信仰の教師また使者として、いたるところに姿をあらわした。彼らは、世界教会的（エキュメニカル）な兄弟関係と、ヨーロッパの信仰の危機を考えて、協力するように、ばらばらになっていた教会を結びつけようとした。

アウグスト・ヘルマン・フランケは宗教改革後最初の偉大な世界教会の重要人物である。[15]

多くの外国の学生たちはハレに向かい、当時最も近代的な大学に集まった。医学部は、例えば、学生の臨床養成を、病院の中に受け入れてもらうことなど、フランケに負っている。

5
公共生活と社会生活の改造を目指す覚醒したキリスト教徒による総合的宗教改革

偉人の列に属している学生の父ヘルマン・フランケは、国の内外の学生たちと共に、喜んで証するキリスト教のように、信仰に覚醒し、進んで献身する者による**世界宗教改革の全体**を宣べ伝え、未来の展望を開いていく改革プランを設計した。それが、彼を、**科学的神学者のための神学者、教育者、社会学者、社会科学者、衛生学者等々の先駆者**とした。

フランケの改革意志は、当時の生活全体の広がりに向けられ、**軍隊制度**と正当な戦争の問題を実際に改善しようとする仲間を引き込んだ。彼は**裁判**を改革すること、すべての法律書をドイツ語で書くことを求めた。またすべてのごまかしをやめ、見通しのきく**短い訴訟手続き**を求めた。

彼は**傭兵制度**を廃止するように望んだ。同じように、兵隊の屈辱的な体罰も廃止するように望んだ。彼は兵隊手帳を編集した。

彼は大衆的な啓蒙文書などによって、国民の健康を改善するために集中的に努力した。

彼の王立学校から、その中には２、３の優れた代表者がいる、プロイセンの公務員と全将校の大部分が育った。敬虔主義の影響のもとで貴族の変革が起こった。自らバロックの豪華な生活態度から離れ、実際の問題に役立つものとなった貴族の反封建化が起こった。外見的には、小さく黒っぽい、飾り気のない背広のように、実際に着るものが変わった。公共生活、社会的生活全体は福音にしたがってつくり変えられねばならない。[16]

アウグスト・ヘルマン・フランケは、よきヨーロッパ人となった。彼は「**セミナリウム・ユニヴァサール**」を計画した。大学教育の最高段階であるこの機関で、全国から集められたエリートたちを、後の職業においてこの敬虔主義的改革意志の担い手となるように、養成するためのものである。そして、そうした職業人たちが全ヨーロッパに、否まさに全世界にそうした改革のセンターの網を広げるべきものとされた。100人のそのような若き男たちが毎年「セミナリウム・ユニヴァサール」をこの目的をもって巣立って行った。

すべての階級で、ドイツの内外で、ヨーロッパで、また世界の残りの、あらゆる場で、真の改革が期待されているこの「種苗場」は、この方式で実現することはなかった。

だが、ブランデンブルグ―プロイセンの国は、初めはためらい、不信でもあったが、その後援助できるすべてをおこなった。

フランケの社会福祉政策の普遍主義は、他の国で効果的に広まった。このことに関する研究はまだ終わっていない。ここで言及すべき彼の世界教会への努力は、実践的に**作業する班をつくり、イギリスの教会の指導的な人々とデンマークの国教会の指導的な人々を、東インドの伝道をするように導いたことである。**彼らはイギリスとデンマークにおいて、また教会内においても影響を与えた。ルター主義はペンシルバニアにおける最初のドイツ人ルター教会連合の発足のため、彼と彼の息子の努力によって、またインドに宣教して出来た若い教会のために、従来のヨーロッパ的偏狭を配慮することによって克服された。

彼が「**ドイツの牧者**」としてすべての階層に働いてきたことについては、約４万通の受け取られた手紙が証明している。彼によって行われた**文書伝道**は、当時、発行部数50万部に達したことがある。

カンスタイン聖書出版の設立と促進によって、**聖書頒布**は著しい拡大を経験した。それはヨーロッパで、同じ時代に、初期の聖書批判と並行して起こり、その時はじまった聖書への熱中は、決定的な助けを与えるようになった。**この内容豊かな課題のために、アウグスト・ヘルマン・フランケは持続的な大きな資金を必要とした。資金の面では、フランケの施設は新しい経済方式をとった。**

公共施設を寄付によって運営するこれまでのやり方と並んで、フランケはただちに施設の資金の基盤を、高い収益をあげる経済事業によって確保し、整備する努力をした。そのために、すべて入手可能な国の特権と特典を得るためにどこまでも努力がなされた。彼は、寄付する喜びはある一定の限度をこえることはない、また、ささげる能力が無限でないことを認識していた。彼は、寄付者の了解を得て、寄付の一部を非常に早い時期に収益事業の投資につぎ込んだ。彼は、最初は確固とした計画をもたないで、収益を得る可能性を手探りしていたが、卸売りを試み、貿易と工場経営も始めた。また、ハレの人たちは出版業と医薬品取扱業に集中した。彼は印刷のための製紙工場、本の販売をする出版社の事業経営を成功させようとした。農業経営そのものと家畜販売の多くは自給自足し、コスト削減をするように尽力した。

フランケの存命中に10万ターレル以上が使われて、20万ターレル以上が学校と生徒たちのために支出された。１人のただの個人、１人の牧師であり、教授であり、財産をもたない人が、神の助けを信じて成功を企て、そのような施設を大々的に建設した。彼は、今まで聞いたことがない、なにか新しく、刺激的な同時代人であったし、また、そうありつづけた。一方、寄付金そのものは、かろうじて30年間、収入の12%を保ち、事業経営からの入金全体にふさわしい収益が上がった。高等学校自身は言うまでもなく自分でまかなわねばならなかった。**合理的化を目指して計算できるすべてと、努力をすることでは、彼はどこまでも基本に忠実であり、経済**

事業も同様に彼の神の国の計画のためには無条件であり、貧民のために薬の無料配布をしたように、生徒や大学生のための施設にふさわしい無料給食の拡大をはじめた。孤児院の薬局は、その設立者の遺言に忠実に、設立した初めの100年間、13万ターレル分の主な薬を無料で配布した。プロイセンの厳しい困窮の時、フランケの息子と教え子の1,000人の生徒たちと、施設の大幅に増資された資金を失って困窮に悩む人たちをだまって助けた。フランケの家族自身は貧しいままであった。

私たちはアウグスト・ヘルマン・フランケにおいて、—100年も前に困窮から始めていた、フランス・カトリック教会の**ヴィンセンティウス・ア・パウロ**(1581-1660)**のような—最初の偉大なカリスマ的な人物に、ドイツの福音主義ディアコニーの中で、出あっているのである。**彼のカリスマは数え切れないほどの協力者をつくった。彼の創設の自発性のなかに、方法の天才性、奉仕意欲の徹底性、そして人に伝わって感動させる働きの中に、証明されている。

フランケは、その後の時代にとって、ディアコニー施設共同体のモデルを提供している。ハレの敬虔主義は、大規模な社会改革運動として、打たれた傷の癒しを求めるだけにとどまって固執している人の限界を超えたのである。彼は、その発生を阻止するために戦った。**歴史的な研究は、イギリスのピューリタンの中に資本主義の出発を見、ドイツ敬虔主義の中に社会主義の始まりを見る。**人が適切な社会福祉政策の設計図をもっていて、献身的な協力者を思いのままにできるならば、その時は多くの改革が限りなくなされると考えて、問題に嬉々として楽天的に取り組み、教育に熱中した、敬虔な初期啓蒙主義の影響は明白である。これは確かにドイツ・ルター主義のなかで新しい響きをなしている。

彼の最も偉大な実践的な成功は、この国の中のハレの敬虔主義が到達したものであるが、それが彼らを守った。古いプロイセンは彼によって決定的に形成された。社会福祉国家への道は、近代にとって強制的なものであった。この敬虔主義者たちはドイツの国の一部において、重要な〔プロイセンの〕形成を助けた。彼はこの国に社会福祉の責任感を押しつけただけでなく、プロイセンの教会の民のあらゆる階層に社会福祉の責任感を強めた。[17]

不思議なことには、南ドイツのとりわけ温和なシュペーナー精神に影響された、ヴュルテンベルクの敬虔主義は、こうした社会福祉に疲れを知らずに取り組む不屈性という点では、彼に従わなかった。ヴュルテンベルクでは殆どなにも起こらなかった。[18] ハレの敬虔主義が直接に足場をかためることができたところでのみ、孤児院の設立ががなされ、また学校制度の著しい発展があった。

だが人がハレの敬虔主義に入場を許されないところは、旧態依然のままであった。孤児院は子どもが早期に死んでいく温床であり、汚れと、感謝を知らない愛の欠如の温床であり、その結果18世紀の終わりの3分の1においては、いくつものことが緊急に解決され、家庭に保護されている子どももゆだねなければならない。それ以上に、啓蒙主義の市民階級の人々がする人道的運動のもとで、急いでしなければならないことはなかった。[19] そのように状況は警告していた。

ハレの敬虔主義が一貫出来なかったのは、真の民衆性の欠如が原因であった。それはとりわけ、アウグスト・ヘルマン・フランケの死後、そのことについて法的に狭い性質になったことが原因である。ここに、人それぞれの形の中にある喜びとか美しさの園に直接にかかわっていくようなものが欠けていた。素朴で、厳しさが強調される、学校町にある狭いきれいな路地は、なお典型的なプロイセンの北ドイツのものであり、兵営のような印象をよびさました。[20]

「ドイツの牧会者」の晩年は、人知れぬ悲しみがあった。彼は、彼が達することが出来る以上に努力をしてきた。彼は多くの計画をかたわらに置かなければならず、協力者は不足しはじめていた。啓蒙運動は学生たちの身分のもとで、それを進めていた。彼自身、存命中に新しい精神的な思潮と、思想家が時代の潮流と本気で出会うように、取り組まなかったことについて責任がある。彼の楽天的教養は、自分を冷静にするために役に立ったに違いない。世にある悪と謎めいたものは、単純に、けちらしたりはできない。彼は、ベルリン政府との親密な関係によってのみ、和解のない正統主義—フランケの活動がそこに属している学問的骨組みのなかに専門領域をもっていない—の集中攻撃に屈しなかった。その時、彼はベルリンに領邦等族とつながりをもつ正統主義の前に逃げ場を探さなければならず、彼は意識的に政府のすべてを中央集権

化する努力をし、また今日にいたるまで人にたよって硬直している絶対的な国教会主義の個々の共同体をゆるめる努力をした。

フランケは、ヨーロッパの福音主義教会に人を集めて、ディアコニー協力を可能にした少数の人たちの中で、運動能力を失った国教会を内側から動かし、活動的でない硬直をゆるめる道をしめした。だがそのプロセス自身は、次の世紀に、なお深く、終わることなく続けていかねばならなかった。

6
ツィンツェンドルフと兄弟団、ディアコニー活動をする教会のモデル、宣教奉仕、共同体にふさわしいこと、兄弟団

ライヒスグラーフ・ニーコラウス・フォン・ツィンツェンドルフ(1700-1760)は徐々にはっきりしてきたキリスト教ディアコニーの新しい流れに貢献した。彼は教会史上の元祖的なすばらしい人物である。古いヨーロッパの高級貴族の一員として、彼は神の恵みの伝道者、宣教者、世界教会運動の有効な準備者となった。

２つの願いが絶えず彼を駆り立てていた。「私は子どもの頃から、イエスの永遠の神性を他の人に興奮しないで、心からの愛をもって、そのことを聞けば生きる私自身の心を魅了する感動を持って、他の人に説教するための火を、私の全身の中に持っていた」。そしてこの目標のために戦う仲間を得る、「入会する」という基本的な要求を加えた。[21]

彼の一生の足取りは、キリストへの出発を弟子たちへの出発と同じものにしていた。彼は、すべての解放された教会のなかで、カトリック教会の最も高貴な代表者のなかで、イスラエルの民のなかで、また異教世界に追放されたすべての集団のなかで、いたるところで彼らをみた。彼らが死んで忘れられるのは当然であるということを、黙視できなかった。彼は貴族世界の中にいる同じ身分の仲間をわすれなかった。人は高級貴族のなかにいる彼をボイコットしたのであるが、彼はキリストに無私の奉仕をする多くの家族を彼らの中で獲得した。

彼の最初の真の**協力者**が、気取らないで、探していないのにあらわれた。それは、対抗宗教改革の時にボヘミア—モラヴィアに追放された威厳を備えた兄弟団の子孫で、**モラヴィアの人たち**であった。

おもいがけなく兄弟団の再生が起こった。彼らは、憤慨する正統主義の攻撃に対して、とどまって働けるように、好ましい保護の覆いをつくった。

この**再生した兄弟団**は、ツィンツェンドルフという人物の影響の下で、最古で最小の最も能力のある、すでに純粋なドイツの枠組みを打ち破った最初のドイツ人自由教会へと、成長した。**ここで信徒と神学者との区別は本質を失ったものになった。**職務というものが、才能や職業や証明と取り違えられた。神学者は専門家と取り違えられることはなく、必要とされたのであるが、彼は兄弟団の中の兄弟にとどまった。国の干渉から自由な自由教会が生まれた。彼が自らヘルンフートの日々の聖句を比類のない手段と記念碑にしていったように、それが正しい霊、戦う者の精神—使者の精神を活気づける時、小さくて決然とした少数派に、何が力と賜物を奮い立たせることができたを証明した。ここで若い娘は「戦士の結婚」の中に、ひとしく順応しだけでない。ある教区が導く兄弟教会の中に、また共同体の集会の中でも、居留地と意見をひきつぎ、そして女性のグループにも責任をもたせるようにした。教会会議できめられた一致は、信仰的、教育的、そして愛の共同体を形成した。

ツィンツェンドルフは、モラヴィアの人たちと、キリストの村を建設した。それはバロックの祝祭的輝きと解放された陽気さの中で、彼らが新たな兄弟教会の鏡に映す姿となった。それらの中で、強められた歌う心と共同体を生きる心が生まれた。その仲間の中に見捨てられたり裏切られる労働者はいない、また孤立し忘れられる老人はいない。抑制された熱意をもって、異なる肌の色や、人種というものが意味をもたない信心会が実践されている。

教区民は様々な会の中で、家族を結びつけている絆のように、年齢と性別によって格付けした。会全体では、独身の兄弟と姉妹がいわゆる年齢別グループを設けた。兄弟と姉妹の家は非常に早い時期に出来た、その中で成人した独身の兄弟と、同じく姉妹は、共同生活をし、共同の生活水準を保ち、一緒に料理し、広い農場の種々の仕事場で働き、大きな寝室で眠り、その仲間から、ふさわしい会の長老と、最も親しい協力者を選んで、会の礼拝と会の祝祭を催した。ここに一つの固有の発展があった。

結婚も同様に、一対の夫婦の会を共に形成した。彼らは長を選び、その固有の会の祝祭と愛餐をもった。やもめとなった兄弟とやもめとなった姉妹は、男やもめと女やもめの家のなかで、一緒だった。共同体の中には老人で生活保証のない人はなかった。

会に組織された人たちは毎日礼拝と歌の時間などに集まった。そこで会自身は教会として集まった。その宣教奉仕、離散者と世界教会は本質的な課題と見られ、この奉仕の成長のために出来るすべてのことがなされた。彼らは世界的な広がりをもつキリスト者のただ中にいた。このことは彼らの会の精神を狭いものにはせず、その時各人は実際に旅の杖を手にもった。拘束的なものと自由とは、その際たがいにおりあいをつけるものとなった。[22]

人は人間性を最悪に打ちつけられ、おとしめられているところへと、入っていった。人間性を奪われた黒人奴隷、死んでいるような**インディアンの民、ホッテントット、エスキモーの人たち**に、無私の宣教奉仕がなされた。ツィンツェンドルフは、**東ヨーロッパ**において、彼の兄弟たちと共に、数世紀にわたって、アジアの奥から進入してくる人たちに対抗し、ヨーロッパの警備に携わってきた小さな民族を援助し、その宗教的、すなわちキリスト教的な、そして民族的な生を、新しく形成するように助けた。彼の宗教的な新しい人物像、すなわちキリスト教的な、そして民族的な生を新しく形成するために、**エストニア、ラトヴァ、ウエストス**において、スロヴァキアとその周辺地域で、この奉仕によって、彼らが神からいただいた賜物と使命を新しく理解し学んだ。〔信仰の〕覚醒と民族的存在の復活が起こってきた。

このライフワークの枠の中に、ツィンツェンドルフが、広大な近代という時代の中に、ディアコニー事業の形態と自己意識を展開してきた貢献が横たわっている。

ツィンツェンドルフの人格的キリスト教は、彼の中に燃え上がるイエスの愛の中にあり、すべての人、またそれぞれは人間兄弟であり、世界全体であり、イエス・キリストの証人であるという、抑えがたい渇望と一致した。ここには、見取り図をもたない宣教行動への衝動が根を張っていた。それと同時に、彼と兄弟たちに、近くにいる人、また遠くにいる人に、証する奉仕の方法と内容が、直接に示された。彼はこの世界的な使命のために、領邦教会の硬直した状態をゆるめようとした。彼は、ヨーロッパ全体の移民活動のなかに、奉仕しようとする気持ちをもっているすべてのグループを集め、励ました。

一方で、ハレの施設が啓蒙主義に帰属している間に、19世紀に、この群れから内国伝道とディアコニーの初代の男女が出ている。

彼は、ディアコニーの働きをする共同体のために、—兄弟教会の中で、後に来る時代に、自由意志をもつ教会、宣教義務とディアコニー、適度な共同体であること、そして純粋な信心会、福音的キリスト教徒の構成員の中で—すべての人たちが今でも体現している、見て分かりやすいモデルを、その固有の様式の中に残した。

7
ベツレヘム、アメリカにおける「共産主義的」ヘルンフートの居留地、自発的精神と喜び

ディアコニーの働きをした共同体のもっとも印象的な例は、—〔信仰に〕覚醒したメンバーの３分の１の人たちが、ドイツ人の居留地コロニーの間で、あるいは原住民の間で、いつも何かの奉仕をしていた。絶え間ない往来があった。ベツレヘムに残る古くからの人たちとともに、すべての人のためにパンがつくられていた—**ペンシルヴァニアのベツレヘムの「宿営地」である。**

そのために、捧げものがなされた。

「われわれの結婚した人たちは、旅の途上にあるかのような暮らしをした—男たちは男たちけで女は女たちだけで、子どもは子どもたちだけで—彼らの暮らしは、私たちが最も好ましいと思うような暮しではなく、むしろわれわれの貧しさのために、各夫婦が１区画ずつをもらえるほど多くのものを建てるところまで到達できなかったのである。」［23］

開拓時代の初期に孤独な家庭生活というものはなかった。料理をするにしても食事をするにしても、すべては一緒だった。だが、ここほど、多くの歌が歌われ、演奏される楽しい共同体を見ることはほとんどなかった。最初の北米のパイプオルガン製作者はこの共同体の出身者であった。吹奏楽団は、兄弟団の共同体から、大海のあちらこちらの教会の中に広まった。

音楽と並んで詩は、アメリカにおいてもドイツにおいても、彼らが足場を固めた共同体全体

に、ヘルンフートの救済宗教が放つあかるく喜ばしい信仰を表明した。いたるところに美しい庭園と、時代のセンスにあった小奇麗な場所と、並木道と、そして高貴なブルジョワ的なバロック風の、まぶしいほどの陰影のある白い部屋をもつ、多声の合唱会館と共同会館がつくられた。それらは整然とした精神をあらわしているだけでなく、顕著になった様式に対する意味と、静かで高貴な美しさもあらわしていた。

キリストが彼に示したことに対する、あふれるばかりの感謝を表す救済宗教は、フランシスコのような気持ちにさせる快活さと、ゆったりとしたものの基礎と可能性を残した。

「文字通り夜通し、際限なく働き、歌い、演奏する共同体—彼の几帳面なやりくりと彼のあふれるばかりの明朗さと彼の工場と愛餐と、その波うつ穀物畑と、誇らしげな家畜の群れと、成長する商業と、合唱会館と、子どもの施設と、学校と宣教事業を持つ、共同体がある—これがベツレヘムである!」[24]

彼らは働くこと、歌うことを知り、生きること苦しむ事を楽しんだ。ツィンツェンドルフのまわりにいる男女の顔には大きな苦労の跡が刻まれていた。彼らは英雄的な情熱ではなく、内面から湧き出てくる兄弟のように見えた。

巡礼者の共同体は、しばしば追放された時、いつも巡礼者の杖を手に持っていた。ツィンツェンドルフと兄弟たちは一緒に即席ではたらく労働スタイルを育成してきた。彼らは決まった働き方を義務づけられることは一度もなかった。すでに100年もの間に、学校教員たちと学校教師たちが教育に対して、束縛したり恐怖を与えてきたやり方に反対し、愛と喜びと自由のなかでおこなう教育を支持し、子どもを人として扱うことを支持した。この理由で、**ツィンツェンドルフは、若者の偉大な解放者に属した。**子どもは気高く自由に扱われなければならない。一生の間、伯爵はオリジナルなものに特別な愛着をもち、コピーを好まなかった。彼は教育者に寛容を求め、さらに、個々の子どもたちの特別な性質を愛情を持って直感的に理解し、受け入れると、もう一度寛容を求めた。子どもたちは、彼にとって、だれ一人同じ人ではなかった。[25]

そこで彼は新しい**教育者のタイプ**を養成した。彼はことばによってよりも人格的な存在によって影響を与えるこまかな思いやりをもった静かな態度と、愛に満ちた感情と、ひかえめな態度を求めた。

ツィンツェンドルフの生涯においても、人知れぬ悲劇が明らかになった。彼は天才的な不思議な方法で、18世紀には奥深いところで不確かになってしまったキリスト教全体を、吟味し、これを全く偉大なもので、その信仰はもっと楽しいものだとはっきり表明しようとした。そして、それは〔キリスト教に〕ただ強い衝撃を与えた。だが、ディアコニーと19世紀における内国伝道は、ここに充ちている躓きをぬきにしては理解されない、また、その感謝や、その預言者的な勧告や、その世界教会的な遺産や、そしてまた静かな輝きの、あふれる豊かさをぬきにしては理解できない。おそらく個々の人の、兄弟団の仲間たちに決定的なかかわりをもち、ディアコニーの分野で光を放っている、比類のない最初の時への憧れも、これをぬきにして理解できないだろう。[25*]

8
物乞い、飢饉、8世紀末期における伝染病、啓蒙主義社会の人道的な慈善事業、新たな衰退、いつまでも残る功績

アウグスト・ヘルマン・フランケやツィンツェンドルフのような人物が具現したように、キリスト教全体を奉仕するものにつくり変えた、この広大さに対して、18世紀においてなお**啓蒙主義社会の内部に、大きな歴史的な視点というものはないが、ディアコニーの奉仕をつくりだしたものが働いていた。**

啓蒙主義社会がある種の至福を求める狭い問題から、人間性の思想に移るまでに、この世紀の残りの３分の２の間に行動をおしすすめるためには、おそらく、第３の世代を必要としていた。[25**]

ドイツ全体を襲った恐ろしい物乞いの難は、たちまち、全ての人が物乞いをするように広がっていった。

「そもそもすべての人が物乞いであった。外部の権力からお金を受ける政治家や、何らかの、しばしば清潔でない務めに対して君侯たちから報酬を受け取る宮廷役人から始まって、下級役人あるいは高貴な館の召使いにいたるまで、そうした人々の仲介もまた、お金でやりとりされねばならなかった」[26]

職人は、毎晩、彼の家族の者と一緒に町で物

乞いをするぼろ布を身にまとった。住民の10%がドイツで物乞いとなって生活した。その中でカトリックの地域はもっとひどく見えた。経済状況はよくなく、国内で多くのことが沈滞し、君侯たちは税を浪費した。布告が物乞いに対して発せられたり、騎兵が国中で物乞いを追跡して追いたてても効果はなかった。追跡者が姿を消すと、物乞いが再び姿をあらわした。

しかし、**1772年と1773年に、クアザクセンでは飢饉**とその後の**伝染病**によってだけでも、15万人が命を奪われ、そして1784年と1785年の厳しい冬に大災害が近づいた時、人は町の努力してきた市民階級の心の中をよく考えた。そこで冷静で面白味のない啓蒙主義社会は真の感動をとらえた。牧師が仕える者と同じ身分というのではなく、「真の博愛主義者」としてだけ参加している、そのような教会を人は求めなかった。**ハノーファー**の市長アレマンは模範的に行動した。彼は、1772年と1773年の飢饉の年に、給食施設と貧困施設の開設によって、すべての貧しい人たちを十分に養った、その結果、町で命を失う人はいなくなった。だが、他の場所では数千人もの人がだめになった。

発展した**ハンブルク**は、貧民施設全体の模範となる施設を、1788年11月2日に開設した。その務めに感動した市民の群れは、すべての街角や路地、そして貧民の環境をくまなく調べた。地区の実地での分配によって、ボランティアで10年間で援助を必要とする貧困者の数は半分に減った。街路で物乞いをする人の姿は見えなくなった。[27]

すべては何よりも**自由な寄付でなされ、どこでも気前よさが支配していた**。ハンブルクの貧民施設は毎年18万マルクを受け取り、キールの7千人の住民たちは毎年1万3千マルク以上を貧民に与えた。南ドイツにおいても、同じくらいの寄付金が集められた。しかし、長くなると耐えることができなかった。一部では、人は寛大な気持ちで助けたり、生計のための励ましをしたりしなければならないことを、非教育的な方法で次第に損なっていった。啓蒙主義の人たちが、平凡な思慮によって感情のこもった高揚をすることはよくわかる。熱意がゆるみ、**戦争の困窮と経済の衰退**は裕福を打ちのめし、そして貧困を厳しくし、不幸が再び増大した。

増大した赤字は、結局、公共の資金から補なわなければならず、貧民福祉は縮小された。しかし、なおかなりのことがなされていた。市の多くの孤児院で見る、信じられないような状況は、家庭教育のなかで解消したり、子どもを宿泊させることで終わらせた。

このことは1773年ゴータで起こったのだが、1772年すでにコペンハーゲンで行われていた。新しい工業部門の導入によって、避雷針、土壌改良、火災保険、寡婦銀行、貯蓄銀行、工業高校、裁縫学校によって、民族の高揚がおこった。そのことに牧師自身が指導的に参加し、その際、**本来の職務をしばしば引きのばした。1778年、ライプツィヒのサムエル・ハイニッケは、音声学の方法によって授業をする、最初のろうあ学校**を開設した。イギリスの慈善家**ジョン・ハワード**はヨーロッパ中の監獄と病院と精神病院を見てまわった。その中にある恐ろしい状況を世間に警告した。罪のない狂人をあざけり笑い、危険であれば、しばしば監獄の壁に鎖でつなぎ、死ぬまでムチ打ちを強要するという過ちを犯してきたが、今や、よい時が到来した。医者の**ピネル**は当時、激しい反対に囲まれながらヴィセートルの狂人たちを鎖から解放し、彼らを社会的に危険な人としてではなく、病人として治療することを敢行した最初の人であった。

啓蒙主義時代における人間性の思想は、実を結ばないままであったのではなく、博愛の数え切れないほどの手本を示してきた。かなりの数の荒れ果てた状態が除去された。公共の病院で看病の分野も、女性の働きの独自の分野でも、悪い状態であった。人は、しばしばまったく堕落した人間たちによって構成されている看護人たちと一緒に働いた。その状況はさらに説明するすべてをあざ笑った。ハンブルクの病院さえ、いつも一つのベットを二人の病人で分け合わねばならなかった。どの病人も、この病院に移されることに抵抗した。そこで、人は貧民の部屋の中に病人を置き、他の貧民に病人を世話させた。

1789年フランスで革命が突発し、革命の年は、ドイツにも影響を及ぼし、窮乏の時が来た時、多くのものが滅び、よい手がかりが衰え、悩みの種が生まれてきた。19世紀は嵐のもとに始まり、啓蒙主義は「自分で背負い込んだ」未熟性を慈善の領域でも、すこしずつ適切に克服するだけであった。十分に解決されなかった18世紀の社会問題は、新しい世紀に持ち越された。とはいえ、**一般大衆は、教会から、これ以上の重要な貢献を期待することはなかった**。[28]

注　書名を訳し、原文を( )でくくった

1, Klaus Deppermann,「ハレの敬虔主義とフリードリヒIII世下のプロイセン国(Der Hallesche Pietismus und der preußische Staat unter Friedrich III)」. (I.) Göttingen 1961, 6 頁以下を参照

1*, すでに中世は神の国に一定の席順があり、また高い位の聖職者に特別な座が認められていることを知っていた。市の参事会と貴族のための上席はいつも用意されていることを知っていた。貴族がその中で快適に過ごし、「まどろむ」こともできるベットの小部屋を備えているという事を、人は終わった宗教改革の100年の中で知った。しかし、病気で気の毒な性格の人はこの「ベットの小部屋」を30年戦争の後初めてもらった。同じように神の家が金持ちの埋葬場所になったように、神の家の中に、「貧しい」人々のための場所もしばしばひどく墓碑の設置を制限した。

1**, 教会批判と社会批判などの風潮に関対するものと、無神論に対するものとは別の根源がここに示されているのではない。事実だけが示されているのである。即ち宗教戦争によって「キリスト教」についての失望が生じ、別の面から意見を述べているのである。中世後期の教会批判と社会批判は、隠れていて、後まで影響を及ぼしている。

2, Emanuel Hirsch,「新福音主義神学の歴史(Geschichte der neueren evangelischen Theologie)」, Gütersloh 1951, 91 頁以下. — E. Beyreuther,「敬虔主義の歴史(Geschichte des Pietismus)」, Stuttgart 1978,61—122 頁.

3, 上記 152 頁以下参照

4, E. Beyreuther,「アウグスト・ヘルマン・フランケと世界教会運動の開始(August Hermann Francke und die Anfänge der ökumenischen Bewegung)」Hamburg 1957, 35 頁

5, 上記 38 頁参照 — Heinz Renkewitz,「敬虔主義の時代のディアコニー思想(Der diakonische Gedanke im Zeitalter des Pietismus)」, Krimmの「教会のディアコニー職(Das diakonische Amt der Kirche)」の 258 頁以下. (Renkewitzkfの要約)

6, 注 1, 58 頁以下参照

7, W. Grün,「シュペーナーの社会活動と思想(Speners soziale Leistungen und Gedanken)」, 1935 (Diss. Frankfurt).

8, Uhlhorn 653 頁以下 — Renkewitz 258 頁以下

9, 注 1, 599 頁以下参照 (文献資料一覧付).

10, August Hermann Francke,「不信仰の恥と信仰の強さに対して、なお生きた、治められている、愛のこもった、そして忠実なる神の祝福に満ちた足跡 (Segensvolle Fußstapfen des noch lebenden und waltenden liebreichen und getreuen Gottes, zur Beschämung des Unglaubens und Stärkung des Glaubens)」1709,1 章 7 頁

11, C. Hinrichs,「フリードリヒ・ヴィヘルンI世 (Friedrich Wilhelm I)」1941, 559 頁以下

12, 注 10, 81 頁以下参照

13, E. Beyreuther,「アウグスト・ヘルマン・フランケ (August Hermann Francke)」, 1956, 5 頁以下. 注 1, 91 頁以下参照

14, Beyreuther,「フランケ (Francke)」174 頁以下参照

15 , 注 4 参照.

16, 注 1 と注 11 参照

17, 前記詳述参照. E. Beyreuther,「アウグスト・ヘルマン・フランケ (August Hermann Francke)」「新ドイツ伝記 (Neue Deutsche Biographie) München11962. の中。

18 , Uhlhorn 701 頁以下

19, 上記 668 頁以下

20, 注 13, 238 頁以下参照.

21, E. Beyreuther,「若きツィンツェンドルフ(Der junge Zinzendorf)」, 1957 — 同じく,「ツィンツェンドルフとここに一緒に見られる (Zinzendorf und die sich alihier beisammen finden)」ツィンツェンドルフ伝 II 巻, 1959 — 同じく「ツィンツェンドルフとキリスト教 Zinzendorf und die Christenheit ツィンツェンドルフ伝, III 巻」1961:3 巻にある索引 — Renkewitz 282 頁以下参照.

22, E. Beyreuther,「ツィンツェンドルフの神学研究(Studien zur Theologie Zinzendorfs)」, Neukirchen 1962 (兄弟関係と共同体のよさ (Bruderschaft und neue Schau der Gemeinde)

23, Heilmuth Erbe, Bethlehem, Pen.,「18 世紀の共産的ヘルンフートコロニー (Eine kommunistische Herrnhuter Kolonie des 18. Jahrhunderts)」1929, 39 頁以下, 注 173 頁以下

24 上記 95 頁.

25 , 注 21 — Register 参照

25, ツィンツェンドルフ省略

25** , ヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッツィ(1746—1827) は最初1780年の彼の生活プログラム(隠者の夕暮)についての文学的叙述に見いだされる。以下省略RGG³, V, Sp. 241参照

26,Uhlhorn 678頁.

27, 上記681頁以下.

28, 上記698頁

訳者あとがき

本稿は下記の「ディアコニーと近代における内国伝道の歴史」(E. バイロイター著) 全10章の中の第3章にあたる。

GESCHICHTE DER DIAKONIE UND INNEREN MISSION IN DER NEUZEIT、ERICH BEYREUTHER

宗教改革後の中世ドイツにキリスト教社会福祉の先駆者となった敬虔主義の指導者シュペーナーとアウグスト・ヘルマン・フランケ、そしてツィンツェンドルフを中心に論述している。

宗教改革後におこった30年戦争と飢饉による社会的不安と貧困に取り組んだ人たちが、ただ施設運動に身を挺してまい進したというだけでなく、教育施設を立ち上げて指導者を輩出し社会を改善し、主に植民地やアメリカへ移民の宿営地を拠点としてではあるが、世界を舞台とする宣教的人材を作り出していった足跡を見る。

ここから、私たちが学ぶことは社会福祉が政治や経済の行き届かなかった負い目をぬぐっていくという消極的な思考ではなく、新しい教育産業を生み出していく思考だと思う。「ディアコニー」はドイツのキリスト教(プロテスタント)の社会福祉事業をさしている。本書は、キリスト教社会福祉関係の論文等に多く引用され、その意味で一つの基本テキストと言える。

本書の第1章は「長崎ウエスレヤン短期大学地域総合研究所報第11号」に紙面をいただいて掲載した。続いて本第2章の掲載を許されたことを感謝します。わからなかった箇所を西南学院大学教授河島幸夫氏と福岡女学院教会牧師白井進氏に教示いただいた。記して感謝いたします。増補3版全10章のうち、第二次世界大戦前までの5章を翻訳する計画である。